

序

郷土が産んだ考古学者、原田大六氏がこの世を去ったのは昭和六〇年の五月のこと。六八歳でした。

原田氏は旧制中学時代に考古学に目覚め、以後、長きにわたり、糸島を活動拠点として日本古代史の解明に情熱を傾けられました。「伊都国」とよばれた二千年前の埋もれた故郷の歴史に光を当て広く語り伝えた功績は大きく、すでに没後四半世紀が経過した今日にあっても、その人気に陰りはありません。地元では、今でも氏のことを「大六さん」と親しみをこめて呼んでいます。

持ち前の反骨心をバネに、地道な調査と猛勉強を重ねた氏は「伊都国に原田あり」とその名が知られるようになり、国宝を出土した二つの遺跡、沖ノ島祭祀遺跡、平原遺跡の調査でも中心的な役割を担い、ついには著書がベストセラーになると、その地位を不動のものとなりました。

氏は強い個性の塊でもありました。真理を求める強い志は時に鋭い刃となり、数多の歴史学者たちとの論争を引き起こし、また、学界との軋轢をも生み出す要因ともなりました。その結果、進呈されたあだ名は「けんか大六」。後年、氏の代名詞ともなりました。

しかし、氏の書齋に残された調査研究の記録などからは、外に向かつて見せる顔とは違った、実直で悩み多きひとりの考古学者としての素顔が浮かび上がってきます。

今回の企画展では、終生、糸島地方を活動の場として考古学の研究に取り組んだ氏の足跡を、残された調査の記録や、生前に手がけられた様々な文化財を通してたどるとともに、そこから見えてくる伊都国の秘められた歴史ロマンを原田大六という一人の男の熱き思いを透して感じ取っていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の特別展の開催にあたり、共同主催者として特別講演会の開催など幾多のご尽力をいただきました西日本新聞社、貴重な資料を数多く提供いただきました原田イトノ氏、資料の調査にご協力いただきました荒木重人氏はじめ、多くの関係の皆様にご厚く御礼申し上げます。

平成三二年一〇月九日

目次

I 大六さん 歴史への目覚め 1

1. 大六少年歴史に目覚める
 2. 発掘の手ほどき 今津長浜貝塚
- エピソード① 釜塚古墳と大六

II 事象と物象 残された調査・研究の記録 7

1. 三雲石ヶ崎遺跡
 2. 志登支石墓群
 3. 井田用会支石墓
 4. 西堂古賀崎古墳
 5. 雷山神籠石
 6. 今津鎌倉山中世火葬墓
 7. 原田の青銅器研究
- エピソード② 友への支援 八女市亀ノ甲遺跡

III おれは二百年生きた 二つの国宝出土遺跡の調査 29

1. 沖ノ島祭祀遺跡
 2. 平原遺跡
- エピソード③ 原田の遺言

IV 歴史を語る博物館の創造 博物館学芸活動 39

1. 原田と三奈木歴史館
2. 糸島の兄弟博物館
糸島高校郷土博物館と志登志石墓群出土品収蔵庫
3. 伊都国王墓展





特別講演会
 期日 平成二十二年一月一六日(土)午後二時から三時三〇分
 会場 伊都国歴史博物館四階研修室
 講師 森浩一先生(同志社大学名誉教授)
 演題 「原田大六の考古学 町民学者と官僚学者」

- 凡 例
- 1 本書は糸島市立伊都国歴史博物館の平成二十二年度秋季特別展(会期平成二十二年一月九日〜一月二三日)「昭和を駆けた考古学者原田大六 伊都国にロマンを求めた男」の展示解説図録である。
 - 2 文章の煩雑さを避けるため、原田大六氏をはじめとする人物の敬称を略した。
 - 3 本展示会の企画にあたっては、榊原英夫館長、古川秀幸、江野道和の協力を得て岡部裕俊が担当した。
 - 4 本書と展示の構成は一部異なるところがある。
 - 5 本書の執筆・編集は、主に岡部が担当し、II・5 雷山神籠石は瓜生秀文が行った。
 - 6 本展示会の開催にあたり多くの機関、個人の方々からご協力を賜った。巻末に記し深く感謝申し上げます。

4. 記録へのこだわり 修復・実測・拓本
5. 原田大六氏著書および関連書籍一覧
 エピソード④ 「弥生式時代の糸島」

おわりに

原田大六氏略年譜

原田大六展 出品目録

原田大六展 図版目録

参考文献

協力者一覧

58 58 56 54 52 51





原田大六氏関連する主な遺跡と施設



大分県熊野磨崖仏の調査を行う原田氏



I 大六さん 歴史への目覚め

原田の幼少期から考古学への志を固めた戦後期の出来事を振り返る

1

大六少年歴史に目覚める



2-1 旧制中学校時代の六六少年



2-2 旧制糸島中学の校舎



2-3 旧制中学時代の学習帖
手書きの挿絵が書き添えられている



2-4 丁寧にまとめられた歴史の学習帖

考古ボーイ大六少年の誕生

原田大六は、大正六年一月一日、父 原田猪之助、母 ユクの長男として、現在の福岡県糸島市前原に生まれた。生家は建築塗装材料店を営んでいた。大正六年生まれにちなんで、大六と名付けられたとされるが、他に五人の姉、妹一人と弟一人の八人兄弟の第六子でもあった。

将来を決定づけた
糸島中学時代

大六は、昭和四年に旧制糸島中学校（現在の福岡県立糸島高等学校）に入学した。成績は、本人いわく「超低空飛行」であったとするが、授業のなかでは社会、とりわけ日本史に強い関心を持っていたことが彼の学習のノートによくあらわれている。

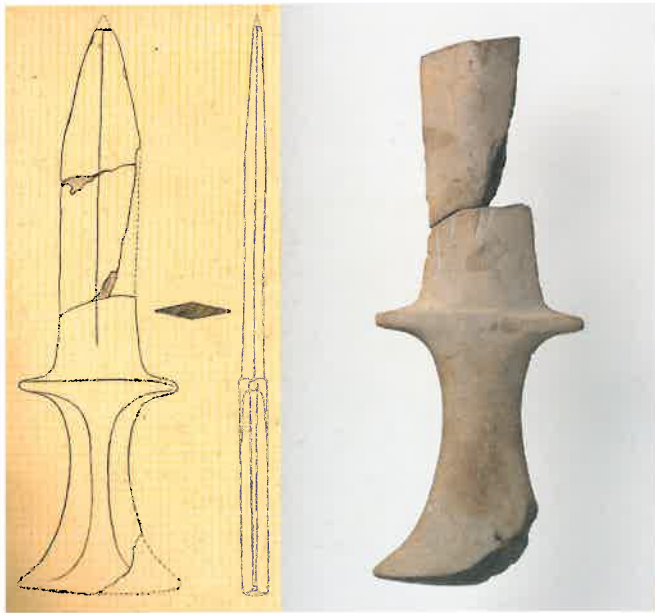
原田家には、大六が中学時代に使っていた学習帖が一〇冊ほど残されているが、日本史のノートは整然とまとめられ、随所に手書きの挿絵が書き添えられ、あたかも歴史の参考書のようなものである。

中学三年生になった昭和六年、東洋史を担当していた安河内隆教諭の強い影響を受け、安河内とともに糸島各地を歩きながら遺物の採集にふけた。

この年は、糸島中学の創立十周年目を迎える節目の年であった。大島六太郎校長から、「郷土室」をあてがわれると、安河内教諭の下で資料の整理を進めていった。



3-2 土偶 (御床松原遺跡古墳時代中期・後列中央 高さ10.8cm)



3-3 有柄石剣 (稲留箱式石棺・弥生時代前期・長さ18.8cm)



3-1 甕 (加布里・古墳時代・高さ cm)



3-5 長須隈古墳舟形石棺

糸島高校に残る郷土博物館の資料台帳から昭和六年に多くの資料が収集されていることがわかり、後の博物館相当施設誕生への布石となった。

II

事象と物象

残された調査・研究の記録

原田は糸島地方を中心に多くの遺跡の調査に関わった。その足跡を記録でたどるとともに、そこから浮かび上がる原田の研究スタイルを検証する

原田大六氏略年譜

元号	西暦	事
大正六年	一九一七	一月一日、福岡県糸島郡前原町前原で、建築塗装材料商店主の父原田猪之助、母ユクの長男として誕生。
大正一四年	一九二五	父が事業に失敗。住居移転を余儀なくされる。
大正一五年	一九二六	父とともに加布里の釜塚古墳を訪れる。開口する横穴式石室を見学し、深い感動を覚える。
昭和四年	一九一九	福岡県立糸島中学に入学する。
昭和六年	一九二一	東洋史の授業を担当する安河内隆教諭の強い影響を受ける。(四月)
昭和七年	一九二二	母ユク永眠。(九月)
昭和八年	一九二三	高祖の横穴式石室古墳の調査を行う。(七月)
昭和九年	一九三四	糸島中学を卒業する。
昭和一〇年	一九三五	上京し、津上製作所に入社。
昭和一二一年	一九三七	父猪之助永眠。(四月)
昭和一三年	一九三八	徴兵により中国に出征。
昭和二〇年	一九四五	中国にて終戦を迎える。
昭和二一年	一九四六	復員し、前原町波多江に住む。
昭和二二年	一九四七	中山平次郎博士を訪ねて師事。考古学の本格研究に取り組む。一〇月に福岡市今宿に引越す。
昭和二三年	一九四八	「弥生式時代の糸島」を脱稿。福岡市今津に居を移す。
昭和二四年	一九四九	石ヶ崎で支石墓を発見し、発掘調査を実施する。(二月)
昭和二五年	一九五〇	一貴山銚子塚古墳の発掘調査が行われる。(三月)
昭和二六年	一九五一	今津長浜貝塚を発掘調査。(一月)
昭和二七年	一九五二	朝倉郡三奈木村(現朝倉市三奈木)に赴き、三奈木歴史館の開館準備にあたる。(二月)
		志登支石墓群を発見。(三月)

昭和二八年	一九五三	「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」を『考古学雑誌』に発表。(二月)
昭和二九年	一九五四	志登支石墓群の発掘調査に参加。(二月)
		月の輪古墳(岡山県)の発掘調査に参加。(八月)
		沖ノ島祭祀遺跡の二次調査発掘調査第二回調査。(八月)
		熊野磨崖仏の調査に協力して、大日如来の実測図・梵字曼荼羅の拓本を作成。(九・一〇月)
昭和三〇年	一九五五	『日本考古学講座三』で「墳墓(弥生)西日本」を執筆。
		沖ノ島祭祀遺跡一次調査第三・四回調査参加。(六・一〇・十一月)
昭和三一年	一九五六	原田イトノと結婚。今宿に転居。(三月)
		「鎌倉山中世火葬墓」発掘調査。
		中山平次郎博士他界。(四月)
昭和三二年	一九五七	西堂古賀崎古墳の発掘調査。(三月)
		沖ノ島祭祀遺跡第二次調査第一回調査。(八月)
昭和三三年	一九五八	『沖ノ島』刊行。(三月)
昭和三四年	一九五九	「神籠石の諸問題」を『考古学研究』に発表。(一二月)
昭和三五年	一九六〇	「鑄鏡における湯冷えの現象について」を『考古学研究』に発表。(三月)
		雷山神籠石の西南列石の一部の発掘調査を実施。
		九州出土石砲丁形鉄器の撤回を『考古学研究』に発表。(三月)
昭和三六年	一九六一	『続沖ノ島』が刊行される。(三月)
		「雷山神籠石の列石考」を『古代学研究』に発表。(七月)
		志登支石墓群収蔵庫の展示準備開始。(七月)

昭和三七年	一九六二	<p>「平形銅剣の形成と編年」を考古学雑誌に発表。(九月)</p> <p>志登支石墓群収蔵庫が開館。(九月)</p> <p>「伝世鏡への固執」を『古代学研究』に発表。(二〇月)</p> <p>「南鮮政策と後期古墳」を『考古学研究』に発表(二〇月)</p> <p>「考古学における事象と物象」を『考古学研究』に発表。(四月)</p> <p>「井田用会支石墓」発掘調査。(八月)</p> <p>「挟入片刃石器乃再検討」を『古代学研究』に発表。(九月)</p> <p>「磐井の叛乱」出版。(一二月)</p>
昭和四〇年	一九六五	<p>平原遺跡を発見。二、五月まで発掘調査。</p>
昭和四一年	一九六六	<p>「福岡県「平原弥生古墳」の問題点」を『古代学研究』に発表。(三月)</p> <p>「実在した神話 発掘された平原弥生古墳」出版。(七月)</p>
昭和四四年	一九六九	<p>「伊都国王墓展」を博多井筒屋六階にて開催。(五、六月)</p> <p>「邪馬台国論争」出版。(五月)</p>
昭和四七年	一九七二	<p>「釜塚古墳」発掘調査。年明けに保存論議。</p>
昭和四八年	一九七三	<p>「新稿磐井の叛乱」出版。(六月)</p>
昭和四九年	一九七四	<p>「天神山貝塚」発掘調査。</p> <p>「万葉集点晴」(上)出版。(一〇月)</p> <p>三雲遺跡の発掘調査はじまる。三雲遺跡調査指導委員会委員長に任命される。(十一月)</p>
昭和五〇年	一九七五	<p>「万葉集点晴」(下)出版。(三月)</p>
昭和五一年	一九七六	<p>「日本国家の起原」(上)出版。(二月)</p> <p>「日本国家の起原」(下)出版。(二月)</p>
昭和五三年	一九七八	<p>「原田大六論」出版。(二月)</p> <p>「西日本文化賞」受賞。</p>
昭和五五年	一九八〇	<p>「銅鐸への挑戦」出版。</p>
昭和五九年	一九八三	<p>「阿弥陀仏教碑の謎」出版。(二月)</p>
昭和六〇年	一九八五	<p>伊都歴史資料館の建設決定。</p> <p>五月二十七日永眠。(享年六八歳)</p>

平成22年度伊都国歴史博物館秋季特別展

昭和を駆けた考古学者

原田大六

伊都国にロマンを求めた男

発行日 平成22年10月7日

編集発行 糸島氏伊都国歴史博物館

〒819-1582

福岡県糸島市井原916

TEL 092-322-7083

FAX 092-321-9155

Email: itokoku-museum@mist.ocn.ne.jp

URL: <http://www.city.itoshima.lg.jp/soshiki/33/hakubutsukan.html>

印刷 株式会社ディスジャパン
